



「一般気象学 (第2版)」

小倉義光 著

東京大学出版会 1999年4月,

A5版 308頁 2800円+税

教科書・学術書の改訂版が出される条件は四つある。まず第一に良書であること。次に、その本が長年にわたって読み継がれ、いまなお需要が多いこと。三番目にはその研究分野の近年の発展が著しいこと。そして四つめには、著者がその進展のなかで初版時と変らぬ情熱を持ち続けていること、である。

我々の分野では、例えばハロルド・ジェフェリースの“The Earth”, もっと身近なところではホルトンの“An Introduction to Dynamic Meteorology”などがまさにその好例であると言えよう。

さて、ここに紹介する小倉教授の「一般気象学」も、気象学会員なら誰ひとり知らぬ者のない不朽の名著である。出版もとの広告文にある「多様な気象学の諸分野を絶妙なバランス感覚でまとめた…」の言葉に全く偽りはない。今般、上記の四条件をすべて満たした改訂版(第2版)が装いも新たに上梓されたのはまことによるこぼしい限りである。

このテキストは、今から15年前(1984)の初版以来22刷を重ね5万部近くも出たという。通常気象学の専門書が高々数千部であるのに比べ、これは驚異的な数字である。気象学志望の学生のみならず、地球科学一般の人々、さらには最近の気象予報士受験者などに幅ひろく読まれ続けていることの証しでもあろう。

新旧2冊を並べて読み比べてみよう。構成(章立て)は、第8章の「中・小規模の運動」が「メソスケールの気象」に変わっている以外は初版と全く同じであるが、内容の充実ぶりは目覚ましい。全面改訂された序章では、気象学の歴史から近年の進展までをも含め、その学問的性格、学習レベルの進展に対応した面白さと奥深さ、そして社会的関心のありかた、等々、現代気象学の見事な総括が与えられている。

さらに、改訂版で著者が最も力を入れたと思われるメソスケールと最後の気候変動の部分では、ここ10年間の進歩を詳しく取り入れた大幅な書き直しとなっている。このことは、(個々の原論文の直接引用はないが)用いられている数多くの図に1990年代のものが多数を

占めていることから直ちに知られよう。カバーのデザインが70年代の手描き成層圏天気図から1998年のエルニーニョ時期の衛星OLR図に変わっているのもその意味で象徴的である。

旧著への加筆は、もちろんこの3つの章に限らない。ほんの一例を挙げるなら、初版の紹介文(廣田: 天気, 31巻8号)で要望したフェレルセル(間接循環)の実態に関する物理的説明が、新版ではわかりやすく丁寧に述べられている。同様に、傾圧不安定波についても、波動に伴う熱や運動量の輸送作用が学部上級レベルの詳しきできちんと書きこまれている。その一方で、各章の内容に合わせた入門的参考書が「課外読みもの」として紹介されているのも、初めて気象学を学ぶ人にとってうれしい親切な気配りである。

小倉教授は、本書の改訂に当たって、気象学会の何名かの人人に意見を求めたと聞く。さらに、その加筆原稿を、たとえば中層大気力学の部分について、私のごとき者にまで送って、厳密・正確を期すための労を厭われなかった。功成り名を遂げられた気象学会名誉会員としてなお、学問に対するこの謙虚な姿勢と情熱とを持ち続けておられることに頭の下がる思いを抱くのはひとり私だけではあるまい。

まえがきにもあるように、この第2版では初版に比べ文章の内容及び図表がかなり増えている。それにもかかわらずほぼ同じ頁数に収め、かつ定価も据え置きとした編集者清水恵氏のご尽力も是非ここに書きとめておきたい。我が国における気象学教科書の出版に果たしてきた東京大学出版会の功績は極めて大きいものがあると思うからである。

ひるがえって1960年頃の学生時代を想い起こしてみると、当時、気象学の全体像を最初に学ぶには正野重方先生の「気象学総論」と山本義一先生の「気象学概論」がスタンダードであった。この両先生の著作が果たした歴史的意義は十分認められるとしても、その後の40年間にわたる気象学の目覚ましい発展を余すところなく記述したこの「一般気象学」を読むことのできる現代の学生達は本当に幸せであるとしみじみ思う。

すでに本書の初版をお読みになった方も、是非、気象学の復習と最新の進歩をフォローするため、改訂版を読み直していただきたい。そしてまた、この名著の読者の中から、10年後20年後にその時代にふさわしい新しい気象学の教科書を書く人が出て来ることを強く期待したいものである。